

青木かずこ	客人の増えて鯛焼切り身とす
	ホームズとワトソンらしき無月の夜
	竹伐るや会ひたきものに月の姫
	夏痩せを知らず空也の最中かな
	子の飽いて目高の餌の役目負ふ
	踊子の肩で息する路地溜り
	秋の蚊の老母のゆるき手にかかり
	目刺講釈背黒真鯛乾燥度
	風邪の身に電話宅配回覧板
	星の児の大き欠伸や聖夜劇
赤瀬川至安①	年金の暮らしはウフフ桜餅
	俳人四苦八苦晩学明易し
	君と会ふため生まれ来て蟻地獄
	がまがへる明智タイプと織田タイプ
	西瓜南瓜冬瓜糸瓜おつちよこちよい
	軍艦島に零戦のごと赤とんぼ
	へのへのもへじずり落ちしひよろ案山子
	野天湯の月は半眼にて候
	心配を掛けたお詫びの河豚料理
	海鼠食ふ酒池肉林となりにけり
赤瀬川至安②	妻といふ不可思議菩薩花大根
	魚氷に上る部屋干しの赤いもの
	タクシーに飛べるかと聞く万愚節
	梅雨繁し家人の無言なほ繁し
	梅雨の傘二人の距離の縮まりぬ
	てんと虫妻の優しき掌を舐むる

	暮早し足の爪切る不恰好
	申歳の妻秋蟬にお手と言ふ
	ひよんの実をぴよんのみと言ふ御方様
	風邪熱の癒へたちまちの減らず口
赤松桔梗	下肥と金木犀の混ざり香よ
	生涯を金木犀は貰い香で
	金木犀今宵カレーか右隣
	金木犀向こう三軒両隣
	犬猿の仲の庭より金木犀
	暖冬の落果狼藉我が庭も
	千個成る隣の柿の憎さかな
	堀越しの柿は我が物好きに食う
	山茶花の散り汚しと妻怒る
	乙女の名貰い暴れるハリケーン
池田亮二	歌合戦老嬢重たきつけまつ毛
	牧師神官順に打ちませ除夜の鐘
	新成人大振袖のおれおめえ
	初化粧足の爪まで赤く染め
	獲れたての知恵満載し受験の子
	烏騒ぐ明日五輪のあるごとく
	山里は猿の領域露天風呂
	まだ当分生きるつもりで薔薇づくり
	寒垢離や生き長らえて鈍感力
	まわりみな恋敵のごとし把恋節(バレンタインデー)
稲葉純子	シュレッター呑み込みすぎて着膨るる
	降る雪が白米だつたら嫌がれず

	大根引地球ごつそり掘り起こし
	煩惱がオーバーラップ除夜の鐘
	師走には弟子が走れば間に合はぬ
	年あらた初もの好きな古女房
	書初めにちなんで描く枯れ頭
	淑気と邪気一字違ひの幸不幸
	雪女一度憧れ顔黒に
	七草粥七癖粥なら頂けぬ
印伯兔	太陽が地球に巨大湿布貼る
	背中より大きな湿布お百姓
	五歳児が肩が凝ったと湿布貼る
	財界と太いパイプのない財布
	情緒ある雨が消えゆく空仰ぐ
	あの国は沈没したか泡と渦
	四季生んだ火山神様恨むまい
	四季問わず常に顔出す嫉妬の芽
	健康に貧乏ゆすりよく効くと
	雷鳥も自然におけば遅しい
上山美穂	にゃんにゃんとすりすりほっとかーぺっと
	小指にて触れたいなるはいぬふぐり
	噴火の閾値低くなってる受験生
	満月や自分磨きに歯を磨く
	芒の穂うきうきまたいで魔女になる
	カタカナをそのまま唄ふクリスマス
	過保護には旅をさせずに足袋はかす
	木枯の口笛耳たぶかじりつく

	書初めの筆の枝毛の今年流
	節分の豆鬼の歯に引っかかる
遠藤真太郎	身投げには水嵩多き花筏
	試さるる動体視力蠅叩く
	文化の日子の教科書を盗み読み
	鮫鱧の刑千年の面構え
	カステラの底のざらめや昭和の日
	勿忘草二番誦んじる唄のなく
	春泥や黒塗り多き公文書
	西陣の機屋は暗き蛍籠
	猫好きにたまらぬ露地の小春かな
	桐材を寝かせ十年下駄の雪
大林和代	炎天下オールドパワー球を打つ
	夏大根辛さに話立往生
	屈んだら魂抜かれさう曼珠沙華
	葉がなくて渋柿いまを気儘にす
	粉のものに腹のふくるる酉の市
	からだ中香煙たたき返り花
	太鼓の音気をふるわせて酉の市
	水面には性を濃くして紅葉かな
	一木に男女の陰や冬の月
	初富士のたかし望むは末吉よ
小助川雅人	松茸や透けて見えるよ椀の底
	徳利に語りはじめる爛の酒
	一茶忌や次の住み処を検索す
	着ぶくれてほぼ球体となる子かな

	すでにもう思い出せずや年忘
	煤逃げは許されぬもの窓磨く
	あっぱれな寝癖の我や初鏡
	異教徒も万来であり初詣
	話すことなく年賀の手酌かな
	日本を離れて行くか宝船
織田亮太郎	逃水もいささか負ひ目あるらしき
	山笑ふデートコースの行き止まり
	尺蠖も待ち合はせへと急ぎけり
	水着にて真向勝負挑みけり
	宇宙への入口となる秋の蚊帳
	敬老の日に現代の加速せる
	色鳥の期待外れもありにけり
	本当は甘えてみたき竈馬
	懐に三寒四温出入りせる
	己が身を確かめてゐる去年今年
加川すすむ①	今年より年齢不詳初暦
	もうとまだ言ひ合ふ老いの朝寝かな
	ブランドのハンカチが泣く皺の数
	秋刀魚焼く夫婦にも要る換気扇
	授かりし鉄の肝臓新走
	紅玉や義歯の歯ざしり聞き飽きて
	選り好みしても寝るだけ穴惑
	銀杏散る嗚呼ジーパンのソクラテス
	凧や地べた座りの痔を案じ
	嫁ぐ気のあるや娘の着ぶくれて

加川すすむ②	肩車凱旋のごと破魔矢上げ
	吊革で眠る特技も新社員
	四月尽教師の渾名板につき
	さくらんぼあれあれ妻のおちょぼ口
	人の字を吞めても喰へぬ南瓜かな
	通帳の利子は芥子粒おけら鳴く
	激安の旅の松茸づくしかな
	レディーって誰のことですとろろ飯
	一族の系図画けさう七五三
	今朝の冬けんかの顔にパンが焼け
金澤 健	落第子長幼の序を説いてをり
	生ビールごくりと汗を押し出しぬ
	超ビキニ太平洋にハワイほど
	いい人で山椒魚のあだ名かな
	生身魂酔うと始まる「世が世なら」
	ビーナスの尻を見飽きず文化の日
	大げんか元は松茸飯の盛り
	身に入むや母に訊かる我が名前
	雨ぽつり真先に告げる木の葉髪
	我が悶え窪みにとどめ干蒲団
神野喜美	うつくしきものほどこはし雛の間
	青葉木菟あたし今夜は飲むつもり
	熟柿吸ふなりみな少しづつ不幸
	ロープから出ないでください鞍馬祭
	ハロウインの端つこにあるりんごパイ
	獵夫きて消費者庁の行方など

	煮凝つてこの頃の二人みたいね
	一月の顔で会釈をしてをりぬ
	よつぽどのご縁というて初御空
	恋を経て恋へと落つる初夢は
木本康雄	逃げ水やあとは野となれ山となれ
	蜃楼ロープほどけし飛行船
	雛の子にとりつぐ恋の糸電話
	笹舟のさしかかりたる一の滝
	わたつみに誘拐されし汐干狩
	目は口ほどにものをいう生身魂
	冬帽の弟子から学ぶこと多し
	寒卵や堅い女の膝がしら
	二上の皇子ふところによく眠る
	善人をなおもて打ちし氷雨かな
久我正明①	デコポンに勝ったと思ふ柚子の顔
	ペンギンは「ふ」の字のかたち日脚伸ぶ
	お疲れのご様子ですね枝垂桜
	紙風船さてはギョーザを食べただろ
	よたよたと腰痛の蟻パン運ぶ
	赤富士の大崩落やかき氷
	空蝉や縄文顔をしてをりぬ
	キク科なる雑草繁る文化の日
	着膨れてペンギンとなる修道女
	太古より海鼠は海のなまけもの
久我正明②	福袋シーラカンスの入ってをり
	寒卵地球を揺らし割りにけり

	牡丹雪座布団ほどの温かさ
	春の旅地獄めぐりにぽっくり寺
	恋猫の火の点きやすき尾の長さ
	神童が普通に帰り卒業す
	あら今日は枝垂桜になつてゐる
	片陰のゆっくり動く電車かな
	安来節覚えて帰る神の旅
	毛皮脱ぎ人に戻ればゴリラ顔
工藤 進	愛の日のチョコのラム酒に酔うてをり
	水槽のふぐの尾に傷涅槃吹く
	傘立ての鍵の開け閉め二重虹
	青鳉のからまる地震研究所
	介護車にヘルパーふたり小鳥来る
	レノン忌の愛聴盤にノイズあり
	叛骨を見せずマフラーの後ろ巻き
	悴んでファスナーの噛むダウンかな
	火を焚くや前も後ろも荒野なり
	面取りの石鱈すべる春隣
久保紀子	折々の四季の移ろい商売にす
	年賀状廃れる波にあがない書く
	お月見が便所の窓とは妙な粹
	お月見でスマホの中の月を愛づ
	スーパーの棚にあふれる季節感
	春先のおしゃれは化繊の花粉症
	この頃は春は鼻から感じてく
	クリスマスにわか仕立てのカップル来

	お芝居の早替りのようなクリスマス
	毎日が登校日の夏休み
興呂木和朗	焼き芋や深き甘みと豊日かな
	ボーナス日明細書見て勇氣湧く
	鮫鰯っておじさんでしょと孫が言い
	紅一葉のみ落つ不思議村議選
	ストレッチさえせず跳ぶか竈ネコ
	ラ・フランス三十年で枯露柿に
	それとなく冬枯れの木をそっと抜く
	翡翠を見たか見たよとハイタッチ
	蜻蛉やハックルベリーの本に降り
	一つ置く黒薬の如き利平栗
後藤酔醒	虎箱に留められたり多喜二の忌
	春色の汽車を逃して一人旅
	女らの乳房みてをり薄衣
	アロハ着て追い返されし門の前
	冷酒をあをりて飾るへどの花
	夏木立弓描き飛ぶ尿(いぼり)かな
	梅雨寒や屁の音一つ死ににけり
	茄子喰ひて高く屁を放る女かな
	角海老に沈む弟あり七月
	珍客が鎮座してをりちんちろりん
小林英昭①	五臓六腑全力疾走新走
	水平線尻仰山向潮干狩
	竹婦人電子音付最新型
	飛花落花桜下西行予約済

	自發中東南西北黄砂降
	俗世捨久米仙人霞喰
	齒科眼科泌尿科繁盛敬老日
	雌螻螂咀嚼音立雄喰
	刀折矢尽恋猫朝帰還
	色即是空空即是色大根穴
小林英昭②	とりあへずサンプルとして梅一輪
	さへづりや新聞つれて行く廁
	代役の目白に梅のおかんむり
	臍の緒を切つて旅立ついかのぼり
	たんぽぽの絮になつたら逃げ出さう
	合戦につひにはおよぶ蛙の恋
	つばくらめ風の先端追ひ越せり
	参加することに意義あり大石忌
	永き日やよつしやよつしやの鳩の首
	朝市にうぐひす餅の歌ひだす
小林英昭③	初音ゆゑゆるせ中八句またがり
	藤よりもたこ焼屋台混んでをり
	ねんねだと思ひし猫のはや孕む
	帰省子に地産地消の大落暉
	炎帝に雨乞ひたのむサプライズ
	糸瓜蔓第一志望にとどかざる
	台風の本気かどうか目でわかる
	干布団湯気たててゐる宝島
	動かざる寒鯉軸に仕立てられ
	岬まで足をのばして山眠る

貞住昌彦	初市は達磨と競う招き猫
	初天神ご利益肩に鳩の糞
	初場所はてけてけすとんと鬚を切る
	ありったけ咲かせてみしょう姥桜
	枝蛙気張る姿ぞ雨近し
	竿先のうつらうつらや小春風
	小春日や浜の干物が雑魚寝かな
	おでん屋のおやじ人生聞くばかり
	○ □ △揃うおでん鍋
	虎河豚のふくれ面で聞く競りの声
佐藤あずさ	返金も謝罪もされぬ初詣
	義理チョコは渡すに非ず配るもの
	赤も白も椿天晴れ生前葬
	シャボン玉といふ幸せを妬む風
	焼きソバでむせて四十路のくる五月
	消去法の人生もあり富士登山
	同じもの嫌は楽しきアイス・ティー
	見えもせぬ孤独可笑しき秋の月
	横道に逸れてみろよと霜柱
	結局は引き算してある除夜の鐘
下嶋四万歩	抱き癖を婆にもつける泣初子
	終活の棺に入りて冴返る
	鰓のなき我は陸の子替衣
	出会して真っ白になる青大将
	寝て待てといふ人酷き夜長かな
	鶏頭に身構へてゐる俳諧師

	京洛に寄ってたかって秋惜しむ
	小春日の手配写真に落ち着かず
	煤払ひ踏み台に立ち踏み台に
	思はずも手焙りしたき燐寸塚
壽命秀次	口癖に高かったのよと出る目刺し
	八百万神引き連れて受験生
	落雲雀お空に音符置き忘れ
	長命を嘆きつドツクへ生身魂
	村芝居違ふ台詞に野次喝采
	飛び出した鼻毛の先まで日向ぼこ
	冬日あび架書に潜める臍繰りかな
	年の暮嗚天下に傭兵さる
	お歳暮の配達に犬吠へもせづ
	帰省子の帰り程なく訛り出し
白井道義	真っさらの国旗に折り目初御空
	どんじりも「以下同文」や卒業す
	無試験で入る予備校春愁ふ
	麦笛を吹いて婿殿募集中
	鼻眞目にみても出目金今ひとつ
	柿食べてコンピューターが鐘を撞く
	マネキンの八頭身や秋うらら
	五郎丸案山子に雀退散す
	足下がふわりと浮いて木枯す
	自画自賛十句の選句懐手
城山憲三	痛恨の二鷹で覚めし夢はじめ
	袴を脱ぎ散らかして老いの春

	鬼嫁は外と小声の年の豆
	戯言と言ひつつ急かす雛納め
	関節の疼き勃発梅雨の入り
	嫌はれているかの素振り竹夫人
	帰省子のことさら都会言葉かな
	砧打つ嫁への不満ありさうな
	巫女さんもネイルアートや神の留守
	断捨離と言ひ張る汝の木の葉髪
杉森大介	小鳥来る狭庭へとパンちぎる
	蛇避けてバイク走らせ注意する
	秋雲を動物の如見るもよし
	残暑増す日差しのがれて影へ佇つ
	葡萄棚ひとつもがれて売り場へと
	鹿の音の夜をさみしがる声と聞く
	此の辺の熊大丈夫でも注意
	梨ひとつ吾の膳へ置く親の居り
	鴨川の人等間隔へ秋の来し
	ただボーっとしてゐる時間秋時雨
杉山安子	口まわりふき味噌なめて句をしる
	顔を出し竹の子辺り見渡せり
	秋の蚊や刺すこと忘れよろよると
	強飯の栗を目で追う子供達
	気が付けば俺もお前も枯れすすき
	雛壇を出すも片すも内輪もめ
	ソース顔流し目送る内裏様
	初詣好きと言われて今夫婦

	手袋の右手知らぬ間家出して
	寝正月ゴロリ転がり又眠る
鈴木カノン	招かれて月下美人のかたわらに
	湯上りの鏡見ぬよう枇杷の花
	晩菊や逢わずにいるがよろしかろ
	音のなきしっぺ返しや嫁が君
	憂きわれのすこし拗ねいる閑古鳥
	のほほんの横腹突く(つつく)神の指
	すがやかに月に住みいるわたしかな
	では又ねこの世の外の秋泳ぐ
	娘が言えり天然呆けの雪達磨
	ままごとの少女のかかさま菊日和
鈴木鹿洋子	遠足の列を分断赤信号
	転勤の後ろ姿に薔薇の棘
	前置きの長しビールの泡消える
	七色の舌を出し合うかき氷
	楼門の犬のじゃれ合う神の留守
	看護師と妻の肩借る菊日和
	よく喋る口に押し込む芋の秋
	小春日や眠りに落ちる膝枕
	柔肌の胸に押し合う柚子湯かな
	息切れの掃除機さする十二月
鈴木敏文	夢見てる妻のシャンソン解る秋
	大掃除亭主叩けば出るほこり
	落葉掃く箒を投げて母デイへ
	松手入れ烏残せし握り飯

	母と婿よけ合う廊下の隙間風
	束の間に餅搗く音の消えにけり
	冠雪の富士まぶしくて見えぬ明日
	鴟の贅母の筆筥におやつあり
	振り向いてまた椋鳥の列が来る
	初春や証明写真の老いの顔
高田敏男	下味を隠し毒舌生身魂
	すずめ追う一本足の案山子かな
	部屋割はまだ決まらずに神の旅
	新郎の胸に造花や返り花
	柚子風呂に浮いた話の二つ三つ
	下見する三途の川や河豚の味
	年新た減りし余生に目をつむり
	御手付きに男無用の恋かるた
	大荒れや聞く耳持ため冬将軍
	北窓を開けて間借の人の声
竹澤聡	山笑ふ六十歳のアスリート
	甘口のカレーを食べて春惜しむ
	フラダンス教室夏に入りけり
	強運の妻おそろしき暑さかな
	捨て犬の声やや細く秋に入る
	秋暑しみな肉好きの老家族
	認知症検証みみず鳴きにけり
	弱小のプロレスラーや秋寒し
	あくまでも自給自足の村の秋
	衝突やラガー再び失神す

田代草猫	どこがトルコ風なのやら春のライスかな
	鶉と思へば入学子の声よ
	レシートの日付で知るや万愚節
	花過ぎや昭和のテレビ厚ぼつた
	八重桜この絵が今だ売れぬとは
	初恋は悲恋でよろし青胡桃
	栗咲くや納戸の横が書生部屋
	レース着て子ども恐がる子どもかな
	生身魂あだ名シャーリーテンブルと
	カレー頼めばラーメンの来て諸の秋
立花悟	神木にひわいな容注連飾る
	気付かれぬように重力水つ渇
	大仏は序でに寄りし初詣
	向う傷なしに老いゆく恵方道
	蓮根堀り証拠隠滅すすむ景
	啓蟄やめざめの勃起久しぶり
	回向文あとにウクレレ弾く遍路
	いつの日か妻を従え雲の峰
	泣きべその手足はちやんと阿波踊
	遠き日の花野のゆまり母の尻
田中早苗	飢ゑる人金の亡者も地球冷ゆ
	酔っぱき物食べたきなどと帰省女子
	「この玉露美味しいねえ」と新茶汲む
	留年と卒業とあり双子兄弟なり
	バイク駆る初冠雪の鈴鹿嶺に
	柚子風呂にときめき失せし二人かな

	手を取りて夜のトイレや二日月
	生かされる幸噛み占めて七日粥
	今置きし物の在り処よ茗荷汁
	吾が海馬ふるりふうり呆け芒
千坂希妙	カーソルも吹き飛ばしたり春一番
	恋猫の仲を裂いたるドローンかな
	バタフライ苦手と亀の鳴く声す
	半月や金魚すくい紙破れ
	蠅打ってよくよく見れば釘の穴
	スイカ割り野良牛が来るインドかな
	物臭や楊枝拝借茄子の馬
	箸一本指揮棒にして法師蟬
	気になりし耳毛に鼻毛冬籠
	硬骨がやや軟骨に日向ぼこ
司 ぼたん ①	こん夏は脱水予防や泣かんとこ
	蛾眉よせて案山子のマツコ・デラックス
	確かめてみてはマスクの裏表
	八方より煤竹千手観音へ
	『刑事コロンボ』暮の古書肆に括らるる
	歳晩の人にまぎれて人戀し
	本年も根岸歯科より年賀状
	一月の葛根湯が好きやねん
	寒四郎福甘酒を吹いてをる
	穴出づる蛇の眼に權未知子
司 ぼたん ②	エゲレスよりお里帰りの秘画涼し
	もみづれる巴御前とおこゑかな * おこゑ=痴絵=烏澁絵

	枕絵の乱れなき髪帰り花
	茶の花や春画一卷輿入れに
	あらたまのあぶな絵覆ふ人の影
	青簾笑い絵の猫あくびして
	竹皮を散らす R18 展
	ワ印の翁媪や紙魚よける
	定めなき家系の勝絵お風入
	くちなしの実のまだ固く艶本閉づ
土居哲男	永久齒無き健啖や冷やつこ
	青春きつぷ老いのお使い夏休み
	炎天や鳴いて鴉の痰一斗
	十八歳未満の愉快夏氷り
	こましゃくれ妻の禁めを冷し酒
	炎日や門を出戻り男傘
	流星や老いには疾し夢残る
	風鈴を吊るに足りたり嫁の脚
	草餅や翁に常の供え物
	句座の師や父の俳大噓
床井和夫	ごみの山聳えて御用始かな
	小寒の蒲鉾入りのシチューかな
	お互ひの尻を嗅ぎ合ふ春野かな
	時の日のボール止まつて見えにけり
	もう少しましな嘘つけ牛膝
	釣果なき我を見下ろす鰯雲
	木犀や鼻腔空間無限大
	根つからの無趣味勤労感謝の日

	初雪や倍は稼げる歩数計
	冬服の釦十個を掛け違ひ
飛田正勝	七人の残る一人に賀状書く
	初釜や一人縁なき女弟子
	優の子も可の子も並(な)べて卒業子
	春眠を忘れ徘徊する齡
	便りなき今朝の厠や春愁ふ
	この道でいいのかなあと秋遍路
	七五三はレンタルで祝ひけり
	生き残り老老介護神の留守
	妻五つ夫は一つ年忘れ
	長らへば笑ふ死神去年今年
中尾公彦	降誕祭マリーの店の赤きジャズ
	煤逃げの電気ブランの三杯目
	寒柝や星の触れあふ音すなり
	耳ふたつどこにもついて来る寒さ
	冬帝をかくまふジンの空瓶に
	缶コーヒー手にすれ違ふ空つ風
	海といふ平らな寒さうねりをり
	涸れ川をまつすぐにして風の束
	金管楽器磨いてあたり大氷柱
	靴音に三寒四温のひびきあり
中野佑海	残り福信じた籤を大掃除
	春女神自由自在と姦しき
	芝桜ドミノ倒しの消費税
	ダイエット剥き過ぎないでらっきょ漬

	梅雨選挙蛙も水際横滑り
	オレオレとさもし鬼出る朧月
	この恋に疑問符の付く夜半の春
	春闌けし株主総会の泥絵巻
	蚊帳の中うかうか寝れぬ子はボクサー
	秋の虹愚痴撒き散らすホース穴
永松東興	新玉の去年の埃と共に在り
	思い出すまで立っていなさい葱坊主
	春の雷落ちてみる気もないくせに
	古池にわが目飛びこむ目借時
	背泳ぎの天に曝すやメタボ腹
	夕涼みあはれ男も乳首持つ
	落ちるとこまで落ちてしまえば天高し
	大根の下半身の方を買う
	葉隠れの枯蠨螂の殺気かな
	惜別のだらりと延びて雪の空港
仲村ひさ子	空の色何色にする終戦日
	耕せば生きてる化石不発弾
	苦瓜は修羅の土に実りたる
	幾重にも偽装の泡がこの国に
	徘徊す輪廻の街にケセラセラ
	更地にも夏の雲あり悠々と
	泥水や糸瓜の吸へば透き通る
	ありのままないままにあり余生かな
	異邦人阿波踊して和の人に
	焼餅を焼くだけ焼いて余寒かな

西川祐代	富士真奈美ウでなくウだしより美人
	もったいない路線変更名古屋弁
	新幹線乗らずに写真年賀状
	開通し色紙ベタベタラーメン店
	親戚は大事にしようプチ遺産
	家訓だけ残してサラバお爺ちゃん
	閉ざされてサバ缶ひとつ命綱
	日本はいいよ平和の句が詠めて
	うどん県お隣さんは俳句県
野村信廣	一億が総活躍の初詣
	初鏡毛染めをやめて気が楽に
	少子化も猫の子生まれ犬の子も
	戦争と平和に揺らぐ半仙戯
	ふるさとに川の字を書く帰省の子
	雷鳴に娘はムンク妻ロダン
	仲直りさせて三人西瓜食う
	目の霞む齢忘れる紅葉かな
	ラガーみな未来に向けて腕を組む
	日向ぼこ真ん中に居てなお孤独
橋本吉博	目はそこか鼻はこちらぞ福笑
	向日葵といへども向きの左右
	浴衣着てネイルの下駄の派手な音
	軒めぐり帰る燕の暇乞ひ
	手を添へてやりたや葛のつるの先
	敬老のけいは軽かよ今の世は
	騙されて庭に思はぬ帰り花

	神無月頼むあてなき独り言
	葉の先に吾も魚眼の白露かな
	限界の村で気を吐く蕎麦の花
柗ひろこ	さよなら制服春来て私服ご自由に
	啓蟄に先んじてあり治虫(おさむし)忌
	朝寝してメフィストフェレスとねんごろに
	鬼札(ジョーカー)を引かせる遊び春炬燵
	積ん読の山が笑ひて崩れけり
	風船がしぼむエステに行かなくちや
	女王蜂びびつ働き蜂ぶぶつ
	春愁の掃除機にして吸ひかぬる
	切られたる首ぶらさげて花見かな
	蜃気楼あいにく今日は満室で
久松久子	花筏亀の背中に座礁して
	絵馬同士ぶつかり合うて梅二月
	勿体ない勿体ないと懺させて
	七変化奇人変人我俳人
	待ち人のエスカレーターに浮いて来い
	蝉時雨一樹辟易してみたり
	惚け同士同じ話に走馬燈
	葷酒門入れば新酒品評会
	財テクに遠く勤労感謝の日
	南禅寺の松の手入れは五右衛門に
日根野聖子	鳴き真似つ鳩サブレー出し春隣
	片頭痛につきまとわれし梅雨近し
	自衛権発動ヤムナシ藪蚊ノ奇襲

	勘弁ならん私の分だけ小さい白玉
	斜にさせば美人になれさう白日傘
	前期だ後期だ余計なお世話だ敬老日
	林檎剥く遺伝子もまた螺旋とか
	和食の至宝新米の塩むすび
	この鼻風邪女の愚痴のやうにかな
	裸木や命てふもの無一物
藤岡蒼樹	殺生説く住持私服に河豚を釣る
	徒花の親戒めの村芝居
	阿波をどり男姿態の安来節
	特攻乗す飛行機はなし終戦日
	浄土には着いたか否や魂送り
	秋霖の出水守る杜鬼瓦
	秋出水ひとは宙吊り下の世見る
	うそ寒の頻尿雪隠闘ぎ合ひ
	兵に霊込め創る菊人形
	夜神楽の餅投げ拾ふおしき面
堀切綾子	うららかや護美屋の楽に歩が合いて
	伸びて縮んで遠足の列びいちく
	恋猫の恋のそもそも裏の木戸
	恋猫に言って聞かせる風営法
	あるはずの脚力春泥跳べるはず
	あっしにもある日鼻だち墓
	よくぞ藪蚊迷わずに打つ夫の額
	オクラの断面そうねえ蒼いペンタゴン
	秋風よ爺っさまどこまで行っただか

	日向ぼこ破顔の爺の齒の疎ら
本多加奈	菜の花に 指揮棒振って 音楽会
	薔薇の花 片手にもって 作曲し
	満開の 桜道を 電車行き
	思い出の 曲になりそう 赤とんぼ
	純白の 上下二輪の 冬牡丹
	夏の夜 若葉の下の 時計塔
	夏の夜 城へ行く道 静かなる
	風鈴草 綺麗な頃に 作曲し
	二期咲きの 冬も見頃か 寒牡丹
	ショパン聞き ひとりぼっちの クリスマス
ぽん太	散る花の兵は東にまた西に
	核のゴミ行く手果てなき臍にて
	揚げ花火実弾かともまさかとも
	ふところがスツカラカンの風通し
	剃りおとす八月十五日の顔
	身に入みて並ぶ年金受給口
	百八円ポツケに小春豪遊す
	凍えつつ聞かぬいな嘘っぽさ
	マイナンバー寒影潜み寄る気配
	着膨れてただの明日を待つばかり
前田留菜①	日向ぼこ眼つむればみな真赫
	枇杷の花くはへ煙草で微笑める
	苺苗植ゑる膝つきつつ進み
	小春猫片足浮かせ腹を舐め
	自動車のうしろ落葉の立走り

	極月のたんぽぽ茎のなかりけり
	忘年や右へ左へ開く襖
	お多福の指うつくしき舞初
	猫が開けし障子戸やや子出てゆきぬ
	冬深し筋肉の凝り指で観る
前田留菜②	スモール灯色を失う朝寝かな
	苗代床均すゆらゆらふくらはぎ
	蔦若葉電話かけつつじつとせず
	筍のてつぺんゝとこの世かな
	草を引くマジックテープ剥ぐやうに
	花薔薇柵くぐり出てくぐり出て
	蚊を打つや水槽の魚びくつとす
	田草取る腕せはしく脚おそく
	田草取足を移すがゴジラめく
	夕立来る走り出さないひとひとり
前田留菜③	残る雪残る大根伸びあがり
	低きよりさへづりのくる目覚めかな
	紅梅や日の差しくればくろぐると
	水溜りちやぽんちやぽんと雛の客
	たんぽぽの裏見えてあるぬふぐり
	白菜の姿を変へて咲きいづる
	恋猫となつてしまひしやくざ声
	春や路地廃品回収車は歩む
	見えぬもの見んと採血鳥ぐもり
	ぱつと喰ひ即座す蛙露の飛ぶ
真尾公子	大吉に怯え小心者の春

	寒の水砕きて噛んでのむ齡
	剪定の樹より鴉の一財産
	花吹雪わざと迷子になりに行き
	銀金白金継ぐ夫婦茶碗新茶くむ
	コロンボに犯人教える生身魂
	化されに行こふかすすきの夕野原
	エジプトの神横を向く神無月
	セーターをかぶりし闇に静電気
	極月の男の顔に絆創膏
松井まさし	絵双六上がりきれずに冷めた風呂
	初夢もあっさり貫通ニュートリノ
	同時帰宅夜あそびの娘と恋の猫
	ままごとの三角関係日雷
	箱庭を滅亡させて幼児去る
	定住の青大将に目交ぜする
	夕立来そう洗濯物の影に居る
	幽霊がいよいよをする夏芝居
	筋肉食み出す男の胸の赤い羽根
	一年の謀叛好色除夜の鐘
三宅あき子	大噓と共に帰宅の夫かな
	背伸して孫の頭を撫でる新春(はる)
	お洒落どころ失はず梳く木の葉髪
	大盛りの菰ばかりの鍋合宿所
	どなたにも会へない素顔春の風邪
	サングラス外して悪さ出来ぬ顔
	我が前を流しそうめん素通りす

	なま足に負けぬ素足の大年増
	秋蟬に占められてゐる耳ふたつ
	着ぶくれて美人不美人大差なし
武藤三山	集く虫測定器欲し山家かな
	鼻につく能書きばかり鶇高音
	諭吉札松茸山へ採りにゆく
	秋の雲腰痛無用だんご虫
	ピリカラの秋茄子嫁は誉め殺し
	わかさぎの束釣り約し冷凍魚
	散歩怪我四歩あゆめず磯千鳥
	台風や高水準の保険料
	子規の里柿を袂に安保論
	結構は富士の眞みなみ浜千鳥（ふじまなみ）
武藤幸雄	点眼の一滴でみる初桜
	春風や医者 of 帰り薬さげ
	勿忘草南部の鈴と一休み
	呆けても泪一斗原爆忌
	油照りあの爆撃機あれなんぼ
	虫時雨右の耳鳴りくわわりし
	秋の蠅嫌味がなくて肩を貸し
	清水の「安」は「不」落ちの師走かな
	歳の瀬や新聞めくる湿りなし
	岩盤にとどかぬ杭の去年今年
牟礼鯨	竹婦人借るや家主へ足を向け
	髪色は黒に決められ文化の日
	吊るされて連れて行かれる七五三

	死んだ目のミッキーマウス隙間風
	笹の座に着くもパンダの初仕事
	先生対生徒全員雪合戦
	池涸るや引き上げられし乳母車
	ボロ市や靴の出处言ひ淀む
	代官の白州跡なる落椿
	卒業の一名起立申しあぐ
矢嶋博士①	胸に香る小菊を抱いて帰りけり
	五月晴れ唯無知無分別の五左衛門
	初雪やフィガロの結婚本当か
	地や凍り天心の月や凍り鳧
	地吹雪するは窓の外なり缶酎ハイ
	バツハ忌を四十七回シューベルト
	雲雀降て尾はすゞめより長いかな
	ふくらすゞめ羽を収めては瘦せ身なり
	小春日や氷河をかじる鼠の音
	春の泥嘗めをる蠅の舌白い
矢嶋博士②	除夜の鐘一つ聞えてはじまりぬ
	初鴉声に参らばいまだ闇
	晴れわたる此の世の元旦ならではの
	哀しみは瞬間湯沸器無き家ぞ
	それからの以前と以後や漱石忌
	雑煮食ふて猫躍り出す台所
	靴下の踵を抜かず土工かな
	神鳴るや田にひれ伏すや土工哉
	冬空や土工唱ふる日没偈

	去年今年一合の米を研ぎ畢んぬ
八洲忙閑	メールより手書きにしてと初電話
	帆を孕み子宝孕み宝船
	大磯や大忙しの磯遊び
	浮気して不倫と言ひし四月馬鹿
	千円のカットを済ませ髪洗ふ
	雲海の雲の平は雲の上
	天才か色無き風を描くとは
	男体の山粧ひて女体まで
	たいやきのおよげとばかりうたひけり
	夕しぐれ時雨亭へと招(よ)ばれけり
八塚慎一郎	カタツムリちよつとそこまで冒険に
	蝦蛄はその柔き鎧で何守る
	前髪を切ろうかどうか秋愁い
	小粒でも主役食うほど実山椒
	鯖雲を味噌でタイタン想う空
	馬が合う友と食べたい桜鍋
	お歳暮でやたら夕餉がプレミアム
	残り物つめた福かな買いはじめ
	小寒や猫はハナから戦わず
	うらやましふくら雀のダウンかな
柳 紅生①	蜃気楼水のしたたるもののゐて
	泡食ってをる窓際の浮いて来い
	新社員派閥の宙に浮きどおし
	案山子翁かじる脛など見当らず
	日向ぼこ二番煎じのお茶のやう

	豊の秋帯がまわしに見えてをり
	金食ひの草食系の入学子
	未知の世に踏み込んでゆく朝寝かな
	両膝の笑ひ返して山笑ふ
	腹の中腐らぬやうに氷水
柳 紅生②	睡魔との闘ひづくめ能始
	蛸足と蛸足絡む聖夜かな
	おでん酒この世の空気読めてきて
	腹八分二分は薬よ豊の秋
	雪女四面楚歌なる木霊聞く
	聞き流しして聞き漏らす日向ぼこ
	先のない先を模索の朝寝かな
	水鉄砲白旗となるシャツを脱ぐ
	腰かけが命がけなり松手入
	ため息は句読点なり楯を焚く
横山喜三郎	しがらみを振り切りたくて暴れ凧
	酒断ちてしみじみ花に酔ひてをり
	陽炎や宇宙人のせ縄電車
	新築のビル怨めしき遠花火
	巣を揺らすほかなし蜘蛛の自衛権
	ぬくもりて足蹴にされる竹婦人
	怖がり怖がりにゆく肝試し
	装ひは案山子に負けて担ぎゆく
	世は虚飾虚言まみれやクリスマス
	むささびが棲まふ社を拝みをり
吉原瑞雲	ヨイトマケ母が苦労の雑煮餅

	爺ちゃんが達者で伐れぬ鬼胡桃
	加齢なるわが一族の冷素麺
	婆ちゃんも世話になってた蚊遣ブタ
	炎帝に覗き見らるる畑のもの
	少子化は猪に学ぼう雨あがる
	遺恨などなけれど修羅に草を刈る
	父と子がだんまり食らふ蟹の膳
	綿菓子に小鼻舐めらる秋まつり
	ダモイ(帰国)とは疑似餌に等し厳冬期
渡邊美保	寄居虫の殻を出たがる脚ばかり
	ワラビーの尾の踏んばれる春の泥
	火遊びの火のつく蛍烏賊食べて
	石頭ばかりが揃い蛍狩
	身を反らす伸ばす縮める蛇穴に
	気にかかるおほちがふぐりの泡の中
	じゃんけんぼんぐるしかでないブロッコリー
	石蓆の花忘れ上手の姉とみて
	諍いの続くは焚火くすぶるは
	嘘ばかりついて百年雪女